

田植えとタガメ

子どもの頃からずっと憧れていた**タガメ**。日本では極端に数を減らしていて、図鑑の中でしか見られない**幻の生き物**と思っていたが、昨年10月にユキナガのおかげで生まれて初めて野生の成虫の姿を拝むことができた（その時の興奮はぜひVol.164参照）。去年はなんせ初めて見たもんだから、興奮のあまりあんまり上手く写真が撮れなかった（水中の生物の写真ってほんと難しい！）。今年はもうちょっと落ち着いてタガメを見たい。生態も知りたい。

そもそもタガメのライフサイクルをあまりよく知らない。初めて栃木の棚田を訪れた昨年7月初旬には、1齢幼虫から5齢（終齢）幼虫まで、幼虫がたくさん見られた。その時は成虫はいなかった。成虫を見たのは昨年10月、稲刈りの季節。その後タガメは成虫のまま田んぼの近くの山の落ち葉の下などで越冬したはず。

今年の4月下旬、晴れて田んぼのオーナーとなって棚田を訪れてみると、**越冬から覚めたタガメの成虫に再び出会うことができた**。5月中旬に稲の田植えをした日には、ぼくの探しがタガメだったようで見つからなかったが、6月中旬に訪れた時にはあっさりユキナガが成虫を見つけてくれた（やっぱりぼくはいきもの探しが下手だなと痛感）。つまりこの棚田では、**6月から7月初め頃に産卵し、新たな世代が生まれる**ということが分かる。

タガメの産卵は夜、田んぼに植えられた稲や近くの杭などに登って行われる。「**オスが卵を守る行動**」やメスが「**他のメスの卵を破壊する行動**」など、昆虫として珍しい生態をもつので（子どもの頃に本で何回も読んだ）、いつか産卵の様子を見たい。今年は、念願だった**田植え後の田んぼにタガメがいる様子**を見ることができて、それだけでも大満足。田んぼとタガメが共存している、まさに日本の原風景だ。

残念ながら今地球上では、タガメだけではなく色々な生物が「いつか見られるだろう」と**悠長なことを言っていられない状況**になってしまっている。絶滅してしまう前に憧れを叶えたい。そして願わくば、絶滅を免れることができるよう、自分にできることを探していきたい（その一つが、こうやって希少な生き物を紹介して多くの人に知ってもらおうことだと思って書いています）。



前肢を開いて構えるタガメ

カマ状の両手を開いて待ち伏せしながら、カエルや魚などを捕らえて体液を吸う。お尻の先はいつも水面に出ていて、この呼吸管で息をする。



極太の前肢、ふさふさの後肢

こう見ると前肢が極太で鋭い爪があるのがよく分かる。この前肢を使って時には小型のヘビを捕まえてしまうこともあるそうだ。後肢には遊泳毛という毛がたくさん生えていて、泳ぐ時に役立つのだとか。

参考：市川 憲平（著）・北添 伸夫（写真）、2009、タガメ（田んぼの生きものたち）、農山漁村文化協会
内山リゅう、2013、タガメのいる田んぼ、ポプラ社
内山リゅう、2026、新版 田んぼの生き物図鑑、山と溪谷社



田植えの1ヶ月後に田んぼに現れたタガメのメス 2026年6月栃木
植えたばかりの青々とした稲と水面に反射する入道雲。それらとあわせてタガメを撮影できたお気に入りの一枚。田植えの時期は水を張っているのでタガメが田んぼにも移動してくる。昨年秋に初めてタガメを見た時は、田んぼの水は無かったので、いたのは水路や池の中だった。田んぼにいるのを見たのは初めて。これぞ日本の原風景。



息子4歳、初めてタガメに触る

2026年4月栃木
これがどれだけ贅沢なことか、いつか分かる日が来るだろう。息子はこのサイズの昆虫に触ったことが無かったのでかなりビビっていた。ちなみに、タガメはストロー状の口で刺してくる。刺されると激痛らしいので、くれぐれもいい子の皆さんは気をつけてください。